業界リーダー座談会

グローバル時代の日本のモノづくり

世界経済の主役はアジアに 市場を取り込みさらなる成長

2008年秋のリーマン・ショックを契機に、世界経済の主役は欧米からアジアへと大きくシフトした。アジア各国が生産基地としての実力を高める中、日本の大手メーカーの進出が加速している。また中堅・中小企業規模でも単独またはグループで現地に拠点を構え、アジアビジネスに参入する動きが活発化してきた。背景には、アジア市場を取り込むことで将来の成長を確かなものにしようとする事情がある。モノづくりのグローバル化にいかに対応していくべきか。ソディックの古川利彦会長、井口機工製作所の井口薫社長、日進工具の後藤勇社長に各業界を代表して語ってもらった。

（司会は井水治博日刊工業新聞社社長）

出席者

井口機工製作所社長　井口　薫氏

ソディック会長　古川　利彦氏

日進工具社長　後藤　勇氏

《司会》日刊工業新聞社社長　井水　治博

今年の展望

井水　アジア諸国が活況を呈しています。特にインドネシアは生産が急速に拡大しており、街中が自動車であふれんばかりの状態です。ものすごく勢いがあり、活気に満ちています。このほかベトナムやミャンマーなども進出先として注目されています。アジアのサプライチェーンが年々拡大する中で、モノづくりをどう進めていくかが日本の製造業全体のテーマとなっています。今回の座談会では皆さんに自社の海外展開の経験を踏まえて、海外生産・販売の必要性や課題、これからの日本のモノづくりのあるべき方向性などについて語っていただき、今後グローバル展開を目指す中小製造業に向けて有益な情報を発信していきたいと思います。

まずは年も改まりましたので、2013年の景況と展望について、昨年を振り返りつつお話しをしていただきたいと思います。1年前の座談会では古川さんから為替が円安に振れるとのお話しがありましたが、物の見事に現在そうした状況になってきました。今回の座談会も、まず古川さんから口火を切っていただきたいと存じます。

古川　昨年9月までは順調でしたが、10月から世の中の状況が急速に変わり、これに伴い売上高などにその影響が出始めました。現在は改善されましたが、今の円安へのシフトが世の中を変えていくだけのパワーになるかどうかは軽々には難しい部分があると思います。確かに今までの超円高の経済環境では企業の体力が持たないのですが、為替が円安に振れたからといって日本国内でモノづくりができるようになるかというと、そういうわけではありません。何といってもモノづくりに携わる人材が不足しており、抜本的には教育から始めなければなりません。電力の安定供給や値上がりの問題もあります。

日本でモノづくりを続けるのには、常に新しい製品を生み出す姿勢が必要です。中国やタイで生産しているものと同じ製品を、日本でつくっても意味がありません。とはいえ、新製品の開発は2カ月や3カ月で完了するものではなく、どうしてもある程度の時間がかかってしまいます。製品開発とともに、コスト削減に向けた自動化、無人化の取り組みも欠かせません。日本でのモノづくりを成立させるには、こうした課題を一つずつクリアしていく必要があります。

グローバル展開という点では、当社が海外に初めて進出した20―30年前は相手国が日本メーカーの進出をもろ手を挙げて歓迎してくれましたが、今は状況が少し変わりつつあるように思います。現地の技術力が向上し、「わざわざ日本から来てもらわなくても、自分たちでやる」という雰囲気が世界中に広がっているような気がします。

井水　先進国からの技術移転が進み、新興国も相当力を付けてきていますからね。技術力が上がることで自信を身につけているように感じます。

古川　これからは「世界で嫌われない日本」を意識していく必要があるように思います。

株式会社 井口機工製作所

本　社　〒178-0064　東京都練馬区南大泉 1-20-7　TEL.03-3923-1211 FAX.03-3923-8100

大　阪　支　店・名古屋オフィス・福岡オフィス　ISB KOREA CO.,LTD.　ISB CHINA CO.,LTD.　TAIWAN Office